%であった。症例3は，嵌頓結石が炭酸カルシウム石という，興味ある症例と思われた。

5. 胆管狭窄に対する EMS の使用経験

甲嶋洋平，篠　諭司，光永裕子
高橋　淳，仲野敏彦，野口武英
伊藤文憲，大野孝則
（船橋中央・内科）
大久保春男　（同・病理）

手術不能の閉塞性黄疸に対する減黄法として内瘻術が生理的にも日常生活の面でも有意義と思われる。今回，新しい endoprosthesis として注目されている Gianturco 型 Expandable Metallic Stent（以下 EMS）を用いた内瘻術を胆管癌2例，術後良性狭窄1例，胃癌による胆管閉塞1例の4例に施行した。全例で内・外瘻チューブを抜去し退院可能であった。チューブ抜去後4例中3例で経過中に胆道閉塞の所見はなかった。EMS は従来の内瘻チューブに比べて細い挿入経路から，大きな径を有する stent の挿入が可能であり，逸脱が少なく感染の機会が少ないなどの利点がある。EMS による胆道内瘻術は手術不能の閉塞性黄疸の有効な治療法と思われる。

6. 濃厚胆汁症候群の1例

新保和広，真家雅彦，江東孝夫
岡田忠雄（千葉県こども・外科）

われわれは，胆道閉鎖症と鑑別困難であった濃厚胆汁症候群の1例を経験したので報告する。症例は，2か月，男児。主訴，灰白色便，黄疸。血液検査にて，GOT GPT ALP の上昇，T-bil 8.8，D-Bil 6.4 と直接ビリルビン優位の黄疸を認めた。ERCP では胆嚢は描出されるが，総肝管から肝内肝管の描出は得られず，総肝管，肝内肝管の閉塞ありと判断，胆道閉鎖症を否定しきれず試験開腹とした。術中，胆道系は正常であったが，胆汁は濃縮され胆砂様の浮遊物を混じていた。濃厚胆汁症候群と診断し，総肝管，総胆管内を生理食塩水にて良く洗浄した。肝生検では胆管数の減少はないが，小葉間胆管レベルでは胆管径が細い傾向があり，胆汁濃縮の要因の可能性が考えられた。患児は，第59病日，治癒退院，現在，外来経過観察中である。

7. 腹腔鏡下胆嚢摘出術20例の治験例について

中尾照男，永井米次郎，吉田正美
（八街総合・外科）

1992年1月～6月に20例の腹腔鏡下胆嚢摘出術（以下ラパコレ）を経験したので報告した。年齢は32歳～69歳まで。20例すべてが胆石で，1例が腺筋症を合併していた。術前検査は ERCP を原則にしており不成功例のみ DIC-TOMO によった。手術時間は106±33分で術中操作で出血を生じた例や癒着の強いものは時間を要した。術後は全例にドレーンを挿入しており，その留置期間は平均3.5±1.5日であった。術後より退院までの期間は入院前に約1週間と説明してあり平均8±1.6日であった。合併症としては皮下膿瘍1例，出血1例を認めたが，これらは保存的に改善した。しかし胆管損傷の1例は開腹術を要した。期間中ラパコレ以外には胆摘術2例あり，いずれも高度胆嚢炎の症例で，その他総胆管結石6例は1例が開腹，1例がラパコレ併用 EST，4例が EST で治療した。本法は胆石症や胆嚢ポリープ治療の有力な手段として普及していくと思われた。

8. 当院における腹腔鏡的胆摘術の現況

斎藤圭治，光島　徹，永谷京平
南原好和
（亀田総合・消化器内科）
須原　誠，張　仁俊，清水久和
武士昭彦　（同・外科）

われわれは1991年10月より腹腔鏡的胆摘術（以下ラパコレ）を開始し1992年6月上旬までで36症例を経験したので報告した。メンバーとして消化器内科と外科で合同チームを作りラパコレ症例の適応決定や手術，術後管理を行った。年齢は21～75歳（平均48.8歳）で胆石は28例（77.8%），胆嚢ポリープ7例（19.4%），胆嚢腺筋症1例（2.8%）であった。手術成績として，開腹移行例は術後胆汁性腹膜炎での1例，その他の合併症として皮下気腫2例，肝障害7例，創感染3例などいずれも軽微なものであった。開腹例を除いた術後の平均在院日数は4.4日で開腹胆摘に比べ早期退院が可能であった。

9. 腹部内臓血管動脈瘤の3症例

山崎将人，渡辺義二，入江氏康
石島秀紀，太田　真，佐藤裕俊
（船橋市立医療センター・外科）
鈴木泰俊，高良健司，佐藤悟朗
（同・内科）

症例1はイレウスの加療中検査にて腹腔動脈と総肝動脈に動脈瘤を認めた57歳の男性である。破裂の危険を考慮し瘤摘出術，胆嚢摘出術を施行した。症例2は肝腫瘍精査中に脾動脈瘤の診断を得た59歳の女性である。拘束性換気障害および肝機能障害を認めたため肝細胞癌に対